

焼塩壺と花塩壺

http://www.kyoto-arc.or.jp
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



焼塩壺(後列)と花塩壺(前列)
江戸時代の町家跡(烏丸通五条)から出土

近年、東京や大阪などの大都市の再開発で発掘調査が増え、研究が進むにつれて江戸時代の遺跡の重要性が指摘されるようになってきています。

これらの遺跡から出土する様々な遺物のなかで、焼塩壺は考古学では基本的な作業となる遺構や共伴遺物の時期決定の基準に欠かさない資料の一つになっており、比較的早くから注目され研究されています。その理由に、焼塩壺は伝世されずに中身の焼塩が空になるとすぐに捨てられ、製作から廃棄までの時間差が少ないことや、それぞれ異なった刻印があり、短期間にこれを変えていくことがあげられます。さらに、壺塩屋に關係する文献史料が多いこと、器壁が

厚く壊れにくいので、発掘作業でのサンプリングエラーが少ないことなど、他の出土物にない幾つかの特性を持っているからです。

焼塩壺は精製塩をつくる過程で使われるもので、粗塩をこの壺に詰め、焼返して苦汁を取り除くための容器です。生産業者としてこれまでに知られているのは、泉州湊系・泉州麻生系・播磨系・京都の深草系・木野系などがありますが、江戸時代中期以後には「泉州麻生」銘に似せた偽の刻印を持つものが多く現れて、その生産と流通の過程がより複雑になっていきます。

また、出土遺跡をみても江戸時代中期以後からは、大名屋敷や寺社関係、豪商の屋敷といった限ら

れた階層だけでなく、一般の町屋跡からもみられるようになります。普通、焼塩は焙烙で煎れば簡単につくれますから、わざわざ焼塩壺でつくった純白の焼塩が贅沢なものであったにしても、江戸時代前期のように、大名や寺社の専用品ではなくなったことを示しています。これは、他の陶磁器が量産化され大衆化していく寛政とも一致します。

市内の調査地では焼塩壺は各所でみられるのですが、花塩壺は出土例が少ないこともあって京都ではあまり注目されていませんでした。ところが最近、烏丸通五条の調査地から焼塩壺と共に花塩壺も多く出土したのです。そのなかには、今まで類例の知られていない「堺本湊焼・吉右衛門」銘の焼塩壺(下図)や、大変珍しい器形や刻印の花塩壺が含まれていました。

花塩壺というのは焼塩と違って、あらかじめ粗塩を落層のように形作って焼返したものです。その容



「堺本湊焼・吉右衛門」銘の焼塩壺
製作技法から十八世紀前半と考えられる。
0 5cm

新たに見つかった焼塩壺



泉州漢系焼塩壺の刻印の変遷 (渡辺誠「物資の流れ—江戸の焼塩壺—」『季刊考古学』13 1985 雄山閣)を改定

器としての花塩壺も丁寧で可愛らしくつくられており、用途も焼塩とは少し違ったものと考えられます。例えば、岡崎の遺跡からは江戸時代のカマドの下から五個一組で並べられて出土しており、祭祀に使われた可能性があります。また、刻印には焼塩屋の銘だけでなく瓦屋の銘もあり(下図①③)、近年までは瓦屋が盆や暮れなどに配ったという例もあったようです。

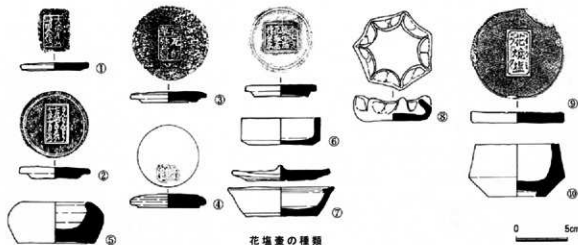
ところで、前述の烏丸通五条の

調査地から出土した花塩壺と、京都市内の遺跡でこれまでに出土したものとを全般にみたところ、泉州産の花塩壺はこれまで一系統しかみつかりませんが、京都産の花塩壺には幾つかの器形や刻印があり、出土量も多いことがわかりました。しかし、同時代の大消費地であった東京の遺跡からは泉州産のほうが京都産のものより多く出土しています。これは、生産と供給体制の整った大手メーカー

である泉州産と、京都の在地メーカーとの販路の違いだろうと考えられます。

焼塩壺と花塩壺は、ほぼ江戸時代と消長を共にする遺物だけに、近世都市社会での生産と流通を考えていく上で大変興味ある資料ですが、考古学的研究だけでなく、江戸時代の文献・絵画・民俗資料などと併せた総合的な検討が必要なことはいまもありません。

(能芝 勉)



花塩壺の種類

①～④は⑤の器形に類する身にとりも蓋と考えられている。この他に「なんばん里う七度やき志本」(富小路通竹屋町)、「なんばん七度本やき志本」(名古屋城三の丸遺跡)などの刻印が知られている。

⑥は身の器形が異なるが、刻印が④と同系になるもの。

⑧は花弁に様々なバリエーションをもつもので、古いものは一粟谷朝倉屋館(1573年焼亡)にみられる(渡辺誠「炊塩壺」『江戸の食文化』1992)。なお、烏丸五条の調査地でも破片が出土している。

⑨は⑩にとりも蓋で京都市内では出土例がない。

⑩は旧藤野院跡や東京、名古屋で数点出土している泉州産のもので、蓋の刻印と身の形態に何種類かの違いがある。

①「大徳瓦師・荷田又左衛門」高倉宮・曇華院跡第4次調査(財)古代学協会 1987

②「なんばん里う七度やき志本ふ草四郎左衛門」『左京六条二坊六町』(財)古代学協会 1986

③「深草・瓦師・弥兵衛」『平安京土御門烏丸内裏跡』(財)古代学協会 1983

④「深草・砂川・権兵衛」⑤⑥「本七度焼御塩花塩壺権兵衛」下京区烏丸通五条出土(財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年度調査

⑦ 左京区岡崎天王町出土(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年度調査

⑧ ③と同じ。

⑨「イツミ・花塩壺・ツタ」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2』1990

⑩ 上京区小川通一条下る出土(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年度調査